

近畿の未来都市づくりが今、リバーフロントから始まった

テクノロジーと自然が融合するところにセキュリティとアメニティは生まれる

自然と人間のバランスが危うくなってきた。河川や水辺に対する人々の意識も急速に変わろうとしている。

河川開発のあるべき姿とは何か。自然との共存関係はいかにあるべきか。

この直面する課題について、日本人の自然観・価値観の国際比較から

リバーフロント開発最前線のスーパー堤防思想まで、地球環境という広い視野から探ってみた。

ヨーロッパ人は自然と うまく共存するが、日本人は…

定道●最近、水道の水がまずいとか川が汚いとか、水に対する人々の関心が高まってきましたが、今日は“河川と水辺”ということを基本テーマに、広い視野から日本の現状を見直してみたいと思います。兼高さんは31年間にわたって世界のすみずみまで見てこられたわけですが、まず、河川を含めた自然というものに対する考え方や態度は、日本と欧米ではどの辺が違うと思われませんか。

兼高●日本人も昔と違って、今は環境に対する価値観がだいぶ変わってきてますけど、昔は川といえば物を捨てる場所としても利用してきたんですよ。ですから、川は景観としてのメインにはなかった。たとえば京都に行くと、小さな流れに沿って飲み屋さんが軒をつらねているところがありますが、流れはかならず店の裏側になっています。これに対してヨーロッパ人にとって川というのは物を捨てるところじゃなくて、第一に美観の場所であり、そしてクリエイティブの場所であるということで、景観の中で占める役割は非常に大きいんですね。

定道●日本の川は短くて急流だという特徴が物を捨てるのに都合良かったという背景もあると思いますが、いずれにしても日本人は自然と一体化しているため、客観的に自然をとらえることが不得手なんですね。

兼高●その点、ヨーロッパ人は自然の使い方が上手ですよ。ヨーロッパの川がきれいに見えるというのは、周囲の美しい自然の中できれいに見えるというのがあるんじゃないかしら。これに比べて東京近辺の川は汚く見えますよね。日本という国はなんでも東京中心だから、すべてのゴミがここへ集まって来ちゃって、それでますます汚く見えるのね(笑)。

定道●欧米では川を都市の中の自然として受け入れ、守っていこうとする姿勢が、とみに顕著になっていますね。

兼高●山にしてもそうですよ。スイスなんか山の中に電車を通すのに遠慮しながら通させていた

いているって感じ。山の景観の邪魔にならないように色づかいにも気を配っていますので、ちっとも人工を感じさせません。同じようにノルウェーも山国ですが、たとえば水力発電の施設でも山をくりぬいてつくっているんです。外から見えるのはみっともないっていうか、とにかく自然を壊さないような作り方をしていますね。

定道●日本の場合は、自然の偽物をよくつくりだるんですよ。いかにもきれいだけど、生きていない。

兼高●本当にきれいにまねてるんらいけど、山を削ったあとセメントを塗ってしかも緑色に塗っちゃうというのは、私、ちょっと悲しくなるんですよ。

定道●最近それはなくなりましたね。山を削るにしても自然の力を生かして、そこで自立させる。日本でもだんだん自然保護の気運が高まっていて、開発するにしても自然との調和を考えるようにはなっています。

まず、 セキュリティを優先してきた日本

定道●地形的にいうとヨーロッパというのは水河がつくった地形に人が住んでいる、これに対し、日本は全人口の約半分が河川の氾濫でできた氾濫原に住んでいるわけです。ということで、日本人にとって堤防は非常に重要な存在なんですけど、ヨーロッパとは自然条件が異なるだけに堤防の形態そのものも違ってきますね。

兼高●日本の場合は堤防で人間と自然を区切っちゃいますよね。しかもコンクリートで固めちゃったりするから非常に無機質な景観になって、自然との触れ合いをばんでしまいます。これに対しヨーロッパでは、ラインの場合で言いますと、堤防というより美しい護岸といった感じなんですね。日本のような堤防らしい堤防じゃない。つまり川との間に境界線をつくらないから、人間は自由に川と親しむことができます。やっぱりヨーロッパと日本では、自然に対する価値観とか美意識がずいぶん違うという気がしますね。

定道●川と町を堤防で区切るというのは、日本が台風による豪雨被害を受けやすいという気象

ジャーナリスト 兼高かおる氏

VS

近畿地方建設局長 定道成美氏



ジャーナリスト 兼高かおる氏

1928年、神戸市生まれ。香蘭女学校、ロサンゼルス私立大学を卒業。帰国後「ジャパン・タイムズ」などのフリーライターとして活躍。58年、世界早回り競争で新記録を樹立。翌年から90年まで「兼高かおる世界の旅」のナレーター、ディレクター兼プロデューサーを務める。取材国約150カ国、地球を約180周、1年の半分を海外取材に費やす。85年淡路島の「旅の資料館」各書館長、86年「横浜人形の家」館長に。兼高かおる旅のアルバム、他の著書があり、菊地寛賞や外務大臣・文化庁・イタリア等からの受賞多数。91年、紫綬褒章受賞。

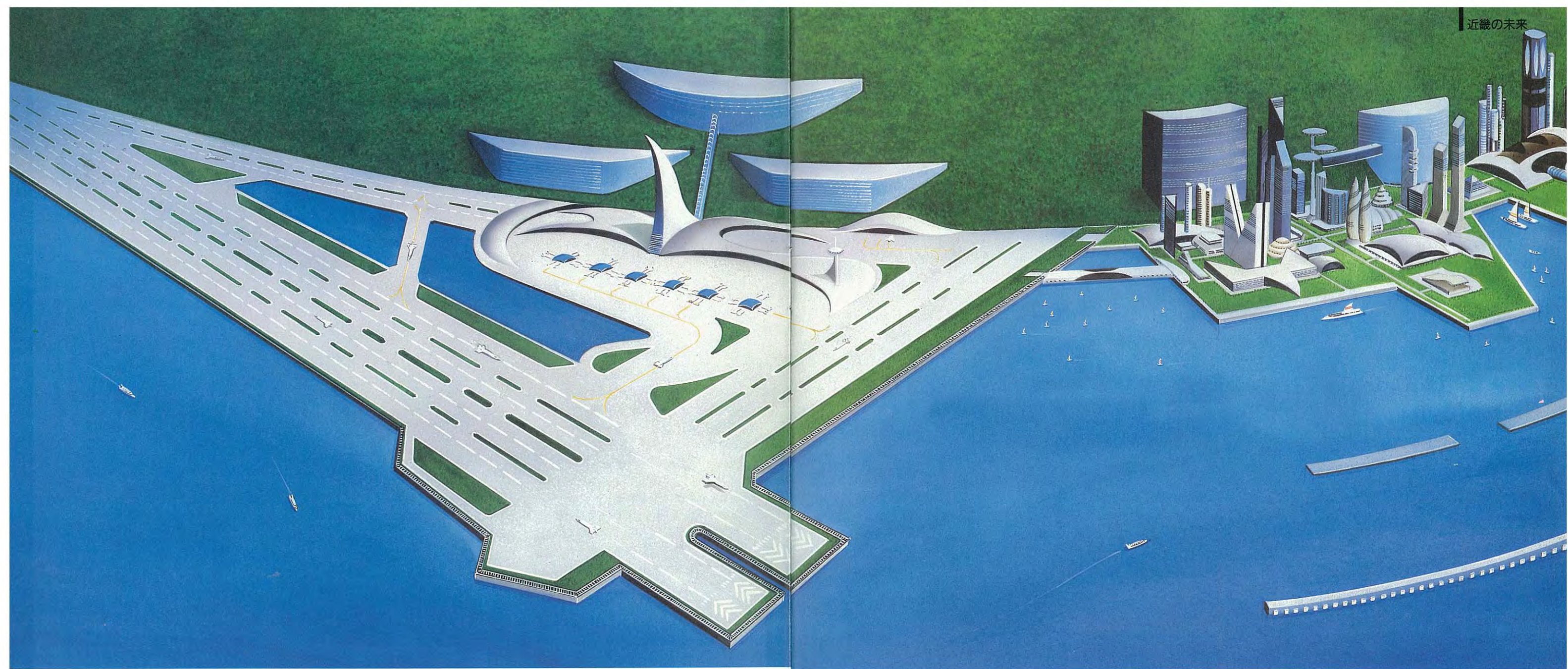
近畿地方建設局長 定道成美氏

1939年京都生まれ。63年京都大学工学研究科修了、建設省に入省。

中国地方建設局の河川畑で活躍、同局企画部長に。

88年、水資源開発公団の企画部長、

翌年、河川局河川計画課長を経て、90年より現職。



条件から生まれた形態だと思っんですね。要するにヨーロッパとは洪水の原因や規模が違うということですね。

兼高●セキュリティの面ばかりに気をとられて、自然とか美観を配慮するゆとりがなかったと…。

定道●そういうことですね。おまけに堤防づくりには、周辺住民の思惑がからむということがありますからね。たとえば上流で川をいじくったから下流で水があふれたとか、対岸の堤防をこちらより高くしちゃいけないとか、そんな対立がおこるんですね。ヨーロッパでは、ラインにしてもダニューブにしても何か国もの間を流れる国際河川ということで、沿岸沿いの国同士のこの種の対立はないんでしょうか。

兼高●ヨーロッパの人たちは隣の国と常に比較しながらものごとを見ていますから、価値基準や判断基準が一律じゃなく幅があるんですよ。ですから日本人ほどひとつのことをあんまりオーバーには考えませんね。

定道●とはいっても、日本人にとって川が氾濫し

て堤防が切れるというのは一大事です。近畿で言いますと、淀川の堤防が万一切れてもしたら、大阪は全滅しますからね。悲惨です。真剣にならざるをえない。

兼高●たしかにそうでしょうね。でも、ハワイなんか高潮が来ることがありますが、みんなお弁当持ってウクレレかかえて山へ行っちゃうんですよ(笑)。それにオランダね、あそこは海拔ゼロmの国ですから堤防をつくってますが、ラインがオーバーすると洪水になるんです。でも、そういうときのためにちゃんと舟が用意してあって、工場なんかも水が出たからといって休みませんね。ですから日本みたいにあんまり悲惨に考えてないみたいですよ。(笑)。これもやはり、島国と大陸の国民性の違い、自然観の違いなんでしょうか。

運河をつくるくらいの心のゆとりがほしい

定道●ところで、週間新潮にロンドンの運河につ



いてお書きになっていましたが、残念ながら日本には運河はないんですよ。

兼高●そうなんです。ですから、知事さんに東京のど真ん中に大きな運河をつくってみては、と申し上げたら「そんなことできませんよ」とはっきり言われました(笑)。東京は高層ビルがどんどん建ちますから、地震なんかの災害が起こったとき、逃げ場として大きな運河があればいいと思っんですけどね。ふだんは美しい水辺で人々の憩いの場所だけど、万一のときには非難場所になる実用的なスペースでもあるということだね。

定道●京都には疏水がありまして、明治から大正にかけてはその水路を使って琵琶湖まで物を運んでいましたが、今は車で運びますからね。

兼高●そういう実用性とか経済効果の面から見ると、もちろん需要はないでしょうね。ですから、あくまでも美観の場所、アミューズメントの場所としての運河ということです。以前に政府の方に申し上げたことがあるんですが、瀬戸内海と日本海を運河で結んで、そこにフリーポートをつくれば日



本海側の開発に役立つのではないかって。もっとも素人だからこんな夢みたいなのが言えるんでしょうけど(笑)。でも、つくってみれば何かと役に立つと思っんですよ。

定道●なるほど。ナポレオンがつくった凱旋門、あれも実用としては役に立ってないけどちゃんと観光の役に立っている(笑)。

兼高●そういうことですね。機能性や経済性ばかり追求していたのでは、ゆとりある空間づくりはできませんよ。

失われた“美の心”を取り戻そう

兼高●日本の戦後の発想というのは、やっぱり貧しさから出ているんですよ。ですから何事も実用的じゃないとだめってことになる。でも、もう半世紀たち、いちおうリッチと言われてる国なんですから、そろそろ発想の転換が必要ですよ。パリの橋はデコレーションがあってとってもきれいで、まさに絵になるんですけど、日本の橋はただ橋が

かかっているというだけ(笑)。

定道●昔は日本人ももっと上手につくってたんですけどね(笑)。

兼高●昔は物をつくるのにも余裕があって、ちゃんと美をとらえていた。ほんとに貧乏だったのかしらと思いますね。経済大国と言われる今の方が精神的にはよほど貧乏ですよ。何かにつけてお金で考えますもの。でも、非実用の美というのは、心にゆとりがないと生み出せないものだと思うんですね。忘れられた日本の美の心を、そろそろ取り戻す時期が来ていると思います。これからは、日本を美しくつくりなくちゃいけませんね。

定道●我々は実用性や経済効率を優先して、ものごとを見ますけど、心のゆとりとか自然を生かした美観の中にこそ、本当の豊かさがある。これからの土木はそういうものを目指さなければいけないということですね。そういう意味で、運河は実に象徴的ですね。

兼高●水を通すってことは、土地に血管を通すようなものだと思うんですね。経済的には役にたたなくても、心のためには必要な実用なんですよ。こうして自然の持つ力を生かしながら美しい景観をつくることは、結局、エコロジーに通じることだと思いますね。

自然と新しい共存関係をテクノロジーが探り始めた

定道●エコロジーのエコはギリシャ語で「家」という意味ですが、川というのは単に水が流れているだけじゃない。いろいろな生物が棲む「家」である、ということを我々河川づくりをするものは肝に銘じておかなきゃいけないと思っています。

兼高●水辺の生態系の破壊ということでは世界的に問題になっているのが、マングローブの林の乱伐ですよ。水中に張りだしている根この部分は魚やいろんな生物のいい住みかになるんですけど、そこに物が詰まっちゃうとか、漁師たちの仕事の邪魔になるばかりで何の役にも立たない樹だということで、どんどん伐っちゃったんですよ。ところが岸辺の浸食は始まるし、生態系はめっちゃめちゃになるし、やっとならぬことに気づいて今はマングローブを保護しようという動きになってきてますよね。

定道●人間というのは、失ってみたいとそのありがたさがわからないんですね(笑)。

しかし自然は、一度壊すと回復するのに膨大な時間がかかるものです。ですから我々の仕事でも、安全性確保のために川の中をいじくることもありますし、サギが巣をつくる大切な樹を伐らなきゃならないこともあります。

でもそれは他に手がないうちの処置であって基本はあくまでも自然との調和、共存ということです。この辺の苦勞を人々にわかっていただきたいという気がしますね(笑)。



兼高●深い配慮をしながらやっているということですね。ところで自然との新しい共存の仕方をハイテク技術を駆使して探ろうという実験が、今アメリカのアリゾナで行なわれているそうですね。1万3千平米の敷地を外界から完全に遮断してその中で人間が2年間暮らすわけですが、内部には森も海も農地もあり動植物や昆虫もいるというように、自然界がそっくりつくられているんです。つまり小型の地球なんですよ。この限られたスペースと資源の中で、生態系を壊さずに人間が生きていくためには自然とどう共存していったらいいか、その方法を探ろうというものなんです。その課程で開発された短期間で成長する樹や魚がすでに商品化されているという話も聞きましたが、ここの研究成果が地球の環境問題を解決するのに役立つことを期待したいですね。それに、この技術を海底に応用したら海底都市も夢ではなくなるかもしれませんね。

定道●今は生命さえ制御しようという段階まで科学は進歩していますから、やる気とお金さえ出して時間をかければ何でもできると思います。そこまでテクノロジーは進んでいるわけで、あと問題なのは、それを地球の豊かな未来にどうつなげていくかを考えていかですね。自然の畏しさ、不可思議さをまず謙虚に受け止めること、その上でテクノロジーをいかに有効に生かせるかを考える人間の心が必要だと思います。

河川アメニティ時代、高規格堤防による新しい都市空間が近畿に誕生!

定道●もともと河川工事というのは、人間と自然の生き物が幸せに共存できることを目指して河川を改善したり現状を維持したりするものなんです。高度成長時代には経済性・機能性が優先され、河川開発の基本を顧みるゆとりがなかった。でも今その反省の時期にさしかかってきて、リバーフロントという言葉に代表される、ゆとりの空間が河川に求められるようになってきました。

兼高●いよいよ日本も、河川にアメニティを求める時代になったんですね。

定道●そうですね。これからはセキュリティとアメニティの調和が河川づくりの基本理念として進められなければなりません。そこでこの理念を実現しようというのが、現在進められているスーパー(高規格)堤防整備事業です。

兼高●スーパー堤防って、どんなものなんですか。

定道●簡単に言いますと、スーパー堤防というのは幅が200~300mある巨大な堤防で、その上に中高層住宅や公園などの施設をつくって、河川事業と都市整備を一体的に進めようというものなんです。どんな大きな洪水が来ても崩れませんし、それに何よりも、これまでの堤防のように川が町から隔離されないという利点があります。要する

に、巨大な堤防というより、丘で川の両側を守っていくというように考えてもらえばいいと思います。

兼高●画期的な堤防ですね。日本の発想なんですか。

定道●いや、ヨーロッパでもあります。プレーメンに行かれたことがあるかと思いますが、この町がすでに19世紀に町を嵩上げて今我々が考えているような堤防の原型を築いているんです。なだらかな洪水敷きを上がり、堤防が丘になっていてビルが建ち並ぶ、これぞ町という感じですよ。

兼高●なるほどねえ。それで、もう日本ではどこか完成しているところがありますの。

定道●あります。スーパー堤防の計画は首都圏の利根川、荒川、多摩川、江戸川の4河川と近畿圏では淀川と大和川が対象になっていますが、その第1号として淀川の枚方市出口地区というところで完成しました。丘の上には民間マンションが建って、新しい都市景観をつくりだしています。その他、守口地区や城北地区にもすでに盛り土が完成していて、そこには公園ができることになっています。

兼高●人がじかに川と触れ合え、しかも川に棲む生き物にも幸せな環境がつかれる。そして自然と融合した美しい都市景観が生まれる。ほんとにすばらしいですね。

定道●50年くらいじっくり時間をかけてつくれば、人間がつくった河川でも自然に溶け込んでいでしょう。

兼高●わが国初のスーパー堤防といふ新空港の建設といふ、関西発展の歩みが着々と進んでいるという感じがします。もともと関西というところは古い歴史と文化とそして豊かな自然に恵まれた地で、条件的には申し分のないところですね、関西はまさに今が飛躍のチャンスだと思いますね。

定道●学研都市という大きな町づくりも動いていますし、関西新空港の建設とともに今計画中の大阪湾をぐるっと回る環状道路が完成すると、関西一円でかなりのレベルアップが図れるはずですよ。

兼高●狭い国土の中で堤防をつくらざるを得ない時代になったのはたいへんご苦勞があると思いますが、美観=エコロジー=人間の幸せというアプローチでがんばっていただきたいですね。

定道●私たち日本人が本来持っていた美に対する感覚は心のゆとりから生まれるものであり、自然と人間の平和共存が求められている今こそ、そういう心が必要なのだと思います。その意味で運河は非常に象徴的で興味深いお話でした。我々の仕事においても、自然の巧みな仕組みを生かした昔の工法も学ぶ必要があるのではないかと考えています。今日はどうもありがとうございました。